生花早満奈飛

八編　全

生花早学八編序

日本紀曰伊弉冊尊生火神時被灼而神退去矣。故葬於紀伊國熊野之有馬村焉。土俗祭此神之魂者花時亦以花祭云

をきけバ神を祭るに花をもちゆる事ハいと古き国風なるべし生花も古代より以て今猶神仏に供じ貴公賓客を容る饗應を添るの一也是起原として後代にしげる此道もまた小水大樹を

以て江山楼裡を併し水辺野岸に臨しさと
草木の風興をしらしめ鶯の囀虫の声
と決されバ其道をたしめる人乃心得ハ
初心の者ハ易し生乃一助ともなるべきその
此書を譜れまりのいとじと賞賛のいまう
そし書をな決者ハ活花の行ととうまするむ

嘉永より八西の秋下旬

松栢菴の主　しるす

生花早満奈飛八編目録

東山殿御物釣船花器之図
龍頭船
和漢三才図会曰
貴人船前畫龍及青鷁者
鷁能所以防水鳥皆欲船不溺波浪
鷁首船
又曰舟爲艦亦此意也云し
畫鷁恠鳥于船首厭水神云云
方言云自関西謂之舫
関東謂之舟云云

東山殿御物十種の船

○龍頭船　表に龍の頭船後に龍の尾なり　前に図を出し

○龍船　地紋に龍の形なり

○鷁首船　表に鷁といふ鳥の首なり　前に図を出し

○唐鳥船　地紋に唐鳥の乱模様あり

右四種ハ御遊の船竜鳥の隠れざるやう花器に麗しく生べし

○海士小船　或ハ貝船ともいふ　○藻苅舟

右二首ハ草花を挿べし

○高涛船　地紋に波涛の模様なり

是ハ少し模様を隠して挿べし風雨の時ハ殊に模様をかくすべし

右も入船伯船に限るべし

○雲船　地紋に雲の模様なり挂船とも銀河船ともいふ此舟ハ晴天にハ紋を隠さず曇天にハ模様を生隠すべし

○蓮華船　蓮花の模様なり水草の内蓮を除くべし

○唐草船　地紋に唐草の模様なり蔓物を挿るを嫌ふ

以上十種なり

○琴船　こまは琴を裏返して綱にて釣しあるく

○掁船　長さ四尺六寸横一尺三寸板をそらし作る奥に図を出し

○籃船　籠にて船の形を作る　○玉船　金器あり

○置船　木にて作る　○竹釣船　許多なり何れも便に委しく出し

橇船 輴 或雪車とも書り北越にて雪中を行に用る具也
南天燭
水仙
○引緒ハ末ハ白本ハ浅葱也
舟の中央に木の篗つりて其内に笹を入る
図のごとし
琴船
糸桜
篭船
八編 五
八編 四

置船

杉木地板　長二尺六寸　横八寸五分

臺四足　高一尺二寸

芭蕉

桔梗

置船ハ花を高く挿下しむ沖舟走舟柴舟ホの類ひよろし凡錠或小石を以て留べし白銅の釣船ハ鏁を中へ入とく

○釣船生方心得并ニ諸説

○釣舟の事ハ諸流其説區〻ありといへども或云凡舳を以て名目を分つ舳の向方座敷の上座に向を出船とし末座の方へ向を入舟とし艫艤真横ニ落し掛に並ぶを泊て船とし（なをも生方にも品ありといへど）

○入船ハ昼後より暮時まで生べし出船ハ明六ツ時より昼後まで生け泊舟ハかゝるゆへ夜生べしと云り然りといへども時刻ニ應じ釣くるならば花形に裏表の難あれバ強ち時刻を一途ニ論ずべからずとぞ

○舟の花ハ垂る枝ハ凡て梶碇の心にて生け垂ざるものハ帆の形と心得下一説ニ泊舟の花ハ必らず屋根づくりの心にて生度由是又道理ㇾ夜の花ニ垂物生るときハ泊舟ニハ心得あるべしとぞ

○沓船
流義によりて恰好のちがひあり
遠州流
○渡海船
川船前後のそりを入れしてちがひはそぐ
寸法はかはりてなし
竹の寸より三アの一をそぐ
藤蔓にて釣之
舟は原来床の正中に掛つりしが後にはあまりに目立ちて所を轉じて落掛につるなり
右は惣長一尺五寸の舟也
又
此恰好にて上の長さ二尺五寸
下の長さ壱尺七寸
石州流
水溜上口にて一尺三寸に作る
穴は三寸より一分の正中也
ト云
○油筒
石州流
此寸法
上の長さ一尺一寸
下の長さ九寸
水だまり七寸
竹のつりにて長短ありべし
○屋形船
或は書院に多くかざりし屋形舟の花はいろいろて入れしと
凡舟の作方と専ら
ひかへて操に花は軽く生べし
屋形船
木蘭
○繋舟
麥
美人艸
○右或家の二百瓶の図に出

出船

舟の正中よりすこしともの方へよせて挿べし片一方のふさがりハ見切となるなれバいづれも両方へハ枝葉のかゝらざるやうに心がけて挿べし

泊船

はるりどう
小ぎく

此下る枝を俗に梶花といふ

○泊舟ハ切者あらでハ挿がたし花生のところハさびしき風情に心をつくべし此枝を俗に綱花と云縦を下れてるし

掛て船ともいふ

○置舟の説

置舟ハ本意にあられ事なれどもいつの頃よりか始りて当世もつぱら用ひ来れり凡そ舟の内に水と見るを嫌ふ事に高く釣とちがひぬれ故に小高き花臺にのせて置方とすといふ水草ハ釣舟にハ生べからずすべて水草ハ置花に用ひてよし

竹筒の置船

出船の形に

○是も順風に帆を上たる体なれバいさぎよく行船とらし

菊

置船ハ鐶と舳の方へ流し置べしと云

入船

○凡て白銅の船ハ前後あれども鎖の一すぢの方を船前とし二筋なるを船後とし出船入船ハ圖のごとし尚功者の業を以て曲となしてハ時の宜しきに隨ふべし泊船ハ逆風にて出帆ありがたき故に帆かけざる体なれバ碇花を入れ艪花帆花の類ハ入ざるなり則ち碇ハ前の方へおろすべし逆風にて船を吹もどされて舳先の方へ碇を下れ是船のあしをひかへる或ハ川口へ入るも船又ハ川船ホハ船を水上へ向せて水上へ碇を下れバ是流るゝ船を留るなり

釣船陰陽の大意 左のごとし

これによりて向ふの方ハ即ち西なり西ハ陰なるゆゑ是を前として釣なれバ入船なり西ハ日の入方の縁によれり

○一説に出船ハ順風をうけて行なれバ帆花を添べし入船ハ帆花をもちいず挿べしともいふ

又湊舟ハ荷物など多く積たるていにて賑やかに挿べし云

○置船に用ゆる時鎖の除様にいろ／＼の説ありといへども只向ふの方へ見へざるやうに刎のけおく方よしとす或ハ置船にハ鎖と船乃底に敷く花器の動くを止るともいふ又泊船にハ舳の方へむすびつくし置ともいふなどさま／＼の事ハ惣て釣手ハ無体なり畢竟これを釣ゆゑの物にして道具にハいらざる体あり則ち船ハ水中に浮む体にして釣手ハ影もなり故に釣手の向ふもなく自然と葉なども從て釣手にて見切ハ悪し又花を以て釣手を見切ハ苦しからず是釣手ハ陰なるゆへ表となく四ツに分て上四ツハ陰下ハ陽とハいへども見切を嫌ふなり下六ツハ遠慮なくかくれなきやうにても只一方を見切ば両手ともに見切べし

○置舟の泊

藤の釣手なり
船ハ垂に用ひて

○図のごとく鎖にて花を見切ハ甚だ悪し
花にてくさりを見切ハゆるしなく

○艪櫂の流しハ枝の下に枝あることを嫌ふ又艪櫂ハ細長きものなれバ下に挿ると忌あり釣船の流しハすべて垂るもの宜し立ものハ用ゆべからず流しと帆柱との間をすかし透しを縁

遠く切て宜しかるべし此間透ざる様に挿べし帆形の花ハ格別高けれハ
かし釣手の下にかゝる方よし去れども花の曲によりて行手見切て
上るとも苦しかるべし時のよろしきに随ふべし
○一説に出舟ハ旅行の餞別に用ひてよし○入船ハ聟取嫁取其余萬
祝義事に用ひてよし○湊の泊船ハ祝義に用ひてよし○沖乃
泊舟ハ祝義にハ遠慮すべしと云
○一書に長舟とある器ハ長さ五尺に巾一尺檜生地にて足付く
是ハ大徳寺の江月和尚好ミによりて大斎の花器く秋草を色々
挿ものなりとぞ花の留ハ所々に竹の筒を沈め置てその花を
風ハ砂物の花形にもあらず様に成程より乱して挿る方よし花乃いろ
数ハ何程にても心に任すべし但花色の差合
ざる様に心得べし且菊一式にて挿もよしと云

○長船挿方畧圖

木の類ハ何にても
挿べからず
夏の花器ハ
潔ぎよくして
最もよろし或云此船の
寸法五尺に一尺ハ甚だ細長にて恰好
宜からず哉四尺に一尺五寸許に作て可なるべしと云

○出船 入船 泊船これを三種の船といふ
柴船 沖船 走船 荘船 沓船 留船 置船これを七種の船といふ
○柴船ハ舟の外へ花の多く出るを嫌ふ凡小菊 水仙 撫子の類よろしく
小輪の花にて挿べし船中柴を見ゆるやうの心得有べし寥しき方よしと云
○沖船ハ出船に釣て帆花を高く上収まりを帆のえにてひとつにまとむる揔て
静に寥く生べしと云遠帆帰處水連雲といふ詩の心ありとぞ
○走船ハ帆を十分にひろげて船後の方へ流しの枝を永くするがよろし
出る揖の心あり根じめを舟の中にて留べし眼前を走る船なり
故に潔く猛く生べし
○荘船ハ貴人の御座船にして海辺に船粧とて美麗に船の具ハを飾り
たてて未だ海上に浮ざる躰なり此故に花を楢原紙に包み水ろを
うけ花の末を艫の方へむけて船の内へ入とく右水を濺べしと云
○沓船ハ床に釣を遠慮なくべし埀物蔓物を生べしものいへ
○留船ハ行を留る心にて艫先へ擢先を出し右閑静なる方よし

寶螺

鮑瓦 釣舟

玉船

鮑瓦の釣糸ハ五色の打紐を用ゆる事もありと云

○一説ニ舟の花器を用ゆる事ハ東山殿の時いくうて極暑の砌ニ暑さの凌ぎがたくされしを仰られ斯る暑さニても海上ニて船中ニも有らバ凌ぐ事の有べきなりと仰せ有けるを茶道松雪斎相阿弥ニ取敢ず船の形ちせし銅の鉢ニ花を生てさし出されバ義政公御覧有て適れ暑さを凌げる心地せり以後ハ舟ニ花を入るの法を定むべしと仰せられければ相阿弥ハ夫より神ニいのりて一の法を定め一巻の書として奉るニ御感斜めならざれバ教へられしを賞しのちぞ是より船形乃花器世ニ行はるゝ事となり然れバ船の花器ハ暑中のものなるべし故ニ今も凡四月中旬より八月中旬までを舟の花器の時とし其余ハ用ひざりしといへりかゝる後世舟の法細密になりて諸流その説大同小異あり

○凡そ舟の法ニ出船入舟泊舟ホの体を定めこれを三段又ハ三体といへり又泊ニ船ニ二段あり沖の泊ニ舟ハ碇を下し舟又是ニ依て碇のつなを花を下げ又湊の泊ニ舟ハ艫の方を陸へつけ歩みの板を橋ニかくるゆゑニ其風情の技をとりて客意の方と定むべしとなり

○宗易の云朝夕ニ出船入舟の差別あるまじけれとて何時にても舳を客ニ對する様ニ鈎れしとぞ是一理ありて面白し其趣意ハ先船でとりて舟つる時ハ舳ハ上座ニして艫ハ勝手なり然れバ勝手を客へ見する事ハ不作法なり心得あるべき歟

一説ニ艫の方ヘ花高く生るハ帆を上ぐる心持ゆゑニ舳の方ヘ花低く生るを出船とし又入舟ハ艫の方ヘ花を低く生るを是ハ帆を

あらしらる心のまゝ舳の方へ花を高く入べしとぞ

○凡て客来て入舟又ハ泊船などを生ると作法とあらず

○諸流よりて船道具に表せし花多くいづれとも是ハ好まざるべしと云

○船の釣やう高さ凡て客立て舟の内見へざるやうに釣べしとあり

古説にハ釣舟ハ下より船のふちまで二尺八寸とあり又一説にハ鴨

居より畳までの丈三分二ほど下て釣べしとも云

又鐶を長くさげて釣ハ大海なる船或ハ泊舟などの釣方なりと云

○舟の花見様ハ先床の前へ行立て一見つゝし直に下に居まで舟乃

底をとる斯て花の釣合を見て感ずる体ゆゑに是を謂ひとはいふ

○古昔ハ床の前後左右の正中に蝿鑑を打て鎖を床の落しかけ際まで一筋さげ夫に舟のくさりを掛たり其後轉じて落がけの内の正中に折釘を打そを用ふ

船の鎖を直に掛る事とせしハ宗易の作意とかや

又廣間大床の時なとハ一間の床ならバ二ッより其二分の正中に釣べしと云かけ物

有ときハ別して然るべく

一説に舟の心得さまざま有といへども平生私の

楽にハ格別凡て花ハ祝儀に用ゆるものなれバ

船ハ天氣快晴して順風に走るを吉とせん

然ればバ其意味を以て時の宜に随ふべしと云

湊の泊船。

或云荷物を積てつなぐるよし

又泊船ハ帆をおろし風情に生るもよしと云 又

凡船ハ唐真鍮紫銅ひるひハ錫なとを以て製し後ニ竹を以て作りしより今専ら行るゝ寸法ハ流義ニよりて各異なり一説ニ一間床ニハ一尺以上長く径より大目床ニハ八寸以上此積りを以て二間床三間床ハ其分量ニ准ずへし又或人の釣舟七宝ニて飾り長さ二尺四五寸中まで五寸常ニ二間床ニ掛ケ置しが更ニ大きくかくして見事なることぞ時ニよりて大輪の花牡丹紫陽花なりとも挿るなり又柳藤なとまかりたる花ニハ船ニしてハ危ふしと云

○楠船ハ信太の森乃千枝の楠樹の風折を取て細川幽斎君の物好ニて釣舟作らせられ△

七夕對舟

○向船とゐるハ七夕の祝義ニ用ゆる所ニて菊の七色の造花をかざり其内へ生の花一色を取合せ図の如く陰陽の花形を備へ星合の[illegible]とゐる備又五色の糸七結び花の枝ニ掛る是を願の糸といひて星ニ手向るなり大書院の花或ハ常の座敷ニハ取合ニよらるべからず此舟七夕にかぎらるべし又秋の草花の多き時節ハつるひハ牡丹芍薬又ハ菊紅葉ホ雙の船の二色で生分る

△野菊ニ蔦の葉を挿そへ あかしよそ

△ことらづき木ニ草花を取合せてよし又一方ハ花の咲ざるものを生ても苦しからず又云

○曬貝の釣舟ハ故人茶會のとき掛物ハ図のごとくの秋夕乃古哥をかけ
塩屋の香爐をかざり曬貝の船をつりて
防風といふ葉ぞろりの草を生ありしかバ
客人ふかく感ぜられしとぞ一説ニ是ハ
紹巴の物好より出し事

○一重と云舟の　ありと云
寸法船の上ハ長サ一尺一寸九分
同下の長サ八寸節よりしりまで
同五寸五分花持くちを九分竹の三ツわり一分
くさりハ船の長サの物ありと云五宝軒これと仿そうじむとぞ

○

草木養方秘傳

挿花ハ草木の養方を第一とすれど何ほど手練して挿るとも精氣衰へ風色薄れ時ハ法に背き殊に會席の花暑に至りてハ人氣に蒸れて衰ふる事多し故に專らやしなひを尽さざれバかなふべからず是を施すにハ先眞行草の時候に季節寒暖の相應をさとり考へ術を行ふべきなり此時に違ふて施してハ其功なかるべし抑眞の時候ハ夏至中五月より秋分中八月に終る又行の時候ハ春分中二月より夏至中五月に終り且秋分中八月より冬至中十一月まで凡て年に両度あり草の時候ハ冬至中十一月より春分中二月に終る是四氣のかよふ所にして春ハ生じ夏ハ長じ秋ハ収め冬ハ蔵るなれど昼夜に配すれバ朝ハ

生じ昼ハ長じ暮に収まり夜ハ蔵る是造化なる所にして此四時は季節一切草木に通ずる故に前に刻りをやしなふて季節を知るべし又養ひをなすにハ寒暖二つより此躰をあらはせバ寒ハ水にして暖ハ火なり此二気通ずるが故に暖氣長ずる時ハ大暑と成寒気長ずれバ厳寒となる凡て手折る草木ハ一端津液費ゆる故に精氣うすし是をやしなひを以て自然の精気を保たしむるなりされバ此養ひの術を施すにハいささかも麁略にすべからず譬バ病を治する薬のごとく不足バ治せず過れバそこなふの理なり増減にこゝろを用ゆべし

○眞の時候ハ前にいふごとく夏至より秋分に終る是太陽の候

當て草木をはじめ凡て精ある物の暖気外に出て内に寒を含む則は毒を内にして衰ふる事多し故に陽中の陽を以て其陰を制するときは忽ち精気潤沢あり其方は先花の大小に寄らず凡て火炉を構へ或は炭団又は性能炭をよく火にして銅鍋に水の深さ二寸二三歩ばかり盛て極熱湯となるべし傍に養桶に水を湛へ置べし扨切たる草木を茎の本五六分ばかり右の熱湯に浸し煮るに随ふて全体に温気めぐり根本白くなりて煮立たる時速かに右の冷水に移し動かざる様に居おくべし尤も何ほど風あたりのつよき所は悪し蒸る事を忌べし如此して朝養ひされば凡そ二時半過て取出し夕方に養ひされば翌朝取出し用ゆべし是真の養し

○根を焼て花を養ふ図

花を竹の皮にてつゝみ濡雑巾にて根元を巻持て根を焼べし

養手桶ハ水入深く上下ひとしく太細なきをよし

指入置し長手桶ハ下細過てよけ

安し瓶も深く口の中しまりたるがよし口廣きハ花ゆけ安くてわろし

花養瓶

養手桶

○行の時候ハ前にいふごとく春分よりして夏至までこれを小陽の位とし
又秋分よりして冬至にいたる是を小陰の位とし此両度の時候を都て
行の時とれ故に寒暖の偏気なく和合の節なる故に草木をきりても
一切の精気全し然れども一度切折たる草木なれバ精気薄く
して水を上ることおそし故に養ひをもつて精気を復ものなり是又
草木の大小に應じて火爐をかまへ春分より夏至までハ堅炭を
用ゆ秋分より冬至までハ消炭を以てよく火をおこして凡そ径り二
三すんばかりおこして周りに灰を覆ひ傍に冷水を養桶に入ておくべし
扨草木の切口五六分ばかり右の火に差入れ炭にあつるほどやくべし
火気循りて全体に温り出れば時早速やしなひ桶にうつし前の如く
やしなひ置べし刻限ハ前に同じ

○草の時候ハ前にいふごとく冬至より春分に終るなりおよそ太
陰の位にいたりて草木をきれども一切の精氣含むが故に落花
落葉せし草木までに萌出て或ハ芽ぐみ又ハ時を得て花咲く
なり其を保つの表ふとも少し然れども切折る草木なれバ
尚難ければ精気保たれ此節養ひハ別に子細なし凍水ゆへ又ハ至て
冷たる水を撰み得と浸し難なし但し新汲水又ハ暖気に近き
所におきたる水ハよろしからず刻限ハ前に同じ
又熱湯ハ陽中の陽にして凍水ハ陰中の陰なり猶又一切表より
温るを少陽とし表より冷るを少陰とすべて草木此方に

りつて養ふよ於てハ過つてと也尚次ニ傳ふるものと挙て紀之

○芭蕉ハ切て葉を薄紙継紙ミてよく包ミ亥ハ真の中もひ秋ハ
行の養ひ又酢を煮ミて切口を漬て尓後水ニ揚けると云

○夏萩ハ竹の皮ミて葉と花と末まで包ミ真の養ひを

○宮城野萩ハ右のごとく包ミて行の養ひよてよし又湯よて挿
るもよし 此事ハすでニ前篇よくハしく出せり

○秋海棠ハ右のごとく包ミて根本を艾ミて包ミ行の養ひを
もしくすべし又行筒に挿ゑハよしろしく磁器の花器に挿べし惣
じて亥秋の間ハ水勢し安きゆへ土器に挿ゑべし

○檀特舊玉簪ホハ亥ハ真の養ひ秋ハ行の養ひよすべし

○棠吾ハ根えを艾ミて一寸ぎかり包ミ真の養ひく

○苅萱芒ハよもかに切ミてよく
消炭をよく火ミて
行の養之

○木芙蓉ハ下枝の節を竹の皮にてよく包き根元を艾にて包き消炭にて竹の筒に挿し或云白水を熱て是に根を入余後水に移るもよし

○柳ハ刃物にて剪るこそ宜しけれ手折るハ好まず随ひやさ曲てふりよくちれを細く水盤に冷水をたへ枝の末にて逆さまにひたし挿ひそとべし

○葉鶏頭ハ節々を切て根を十文字に切より煮湯に入て水にうつれ則ち真のやしるなり

○烏頭ハ根をやきひしぼ水に移るべし

○海棠ハ薄荷の嫩葉をもつて根を包き生るハ妙なりと云

○貝母ハ切口をやきて逆灌水をとべし

○芽出柳二月の頃ハ水上がりし嫩葉萎凋むものゆへ是ハ逆水して横にねし藁苆の類にて包き置べし少時して活のぼるべし或ハ枝に鋸目を入て水に挿をもよし

青柳
芽出しの柳

菜花

○紫羅襴花ハ切口を酢にて煮て其後水にうつすべし

○棣棠ハ切口を叩き挫ぎ酢を以てよく煮其後水に移すべし

○苧環草ハ切口少し切すて逆水として後生溜にさしつべし

○藕坊花ハ木皮に剪刀痕を付切口を二ツ三ツにわりて生器に入るべし

○菜花蘿蔔花ハ切もとげバ潤むゆへ逆水して姑く置バ立直る

○躑躅ハ切口を叩き挫ぎ又ハわりて逆水して生溜に挿べし

○瞿麦ハ花に剪る事ハ辰剋より午剋を限るとすべきなり

○盆に笠の中わじゆで水に入ておくべし

○桜兎花ハ切口を金槌にて叩きひしぎ大えだハ鋸目をつけて生溜に入れあじ又切口をやきてもよし

○河骨 再出 一説に水干の唐猪石を水に和し能くねる程にしよく挿立これを用ゆ焼明礬一分に水一合ひつせ用ゆるもよし又川芎二匁に水一合を煎湯にてよくさまし用ゆるもよし右之法にもいづれも水弾きを以て水を弾きこむべし水上筒ハ第二編小図にあるごとし或云本作乃水弾を用ゆるもよしといふぞ又胡椒を茶にて煎じ用ゆるもよしと云一説ニハ胡椒干山椒番茶各等分をせんじつめ用ゆるもよしと云水せきとは前に同じ

○蓮 再出 一説に酒一合に水一升を手引のかんにして弾きこむべしとはしと云なも水込方ハ河骨に同じ 或云山椒と甘草と上茶とを根より弾きこむハ葉も戻らぬ事なしと云

○細竹ハ露ひる内に酒とたぶらし其中に切口を漬べし水をよく上るといふ

○大竹ハ剪刀時を正しくすると第一とすべし是を知るハ時針を用ゆるハくるふ事無けれどもなければ磁石を以て南北を正し其向に細く直なる竹を立日影一正北にうつる時(正午と云)を以て切べし切るときハ節より五六歩上にて末とも大より無用の枝又ハえだされたをとりのぞき伐去て下の枝を竹の皮にてつゝみ本のふしより一尺七八寸二尺余も下にて伐るべし上の切口ハ飯をかたく結て下の切口より節まで丈を堅く結びむべし右の仕方をつぶん手早く竹のいきぬけぬうちにすべし余しても又ハ真のやしなひにて常よりハ湯を多くして下のふしの上までひたすべしよく煮て上に結ぶる飯のめぐり色づくほどを度として速かに鞘ひ桶にうつすべし剋限ハ例のごとし春秋ハ竹の鞘ひより三則乃ごくじらく焼て全体に温気通じたる時さしこみて鞘桶に移すべし冬の鞘ひハ格別なり切時ハ未明又ハ黄昏に伐るべしのち鉄の剌臭にて末の節より取れて下のふしを残し薬水を切ちみ少し下の方までそゝぎ入末の口と木綿かるひハ紙にてまるくと薬水の際まで結て鞘桶にて例の剋限にやしなふべし

竹薬水の法

新鹿角菜(四文目) 二合これを擂盆に入水一升入てよく擂ろく竹の大小にして二升三升猶数升製して用ゆべしすべて前日にたくはへて入て能封じ置用ゆべし

○葭芦の類も入れ程に切て右のごとく細き鉄の刺具にて下の
ふしより末の節まで貫き右茶水をそゝぎ込み根本を紙
にて結冷水にうつし殖ふべし

○嫩雞冠木は枝の本を水に挿んと思ふ程の長を鋸目を入れて
汲立の水にて逆水して生器につけ置ば勢ひよくもつ又日を重
ぬしものは切口をよく焼て其切口を切捨木通の末を水に和し
其水につけおき其後花器に挿べし

○葉牡丹は四季とも挿花に用ひてよきものなれども四月下
旬のころより七月の下旬までは水上がりあし是は葉に絞つきて根を
叩き些わりて逆水し又冷水に際までさし入置しば水を上げ
後に花器に挿べし

○桐の花を殖ふるも又右にもおなじ

○一説に夏の草花の
水上がらざるものには
水一升 塩三合
薄荷廿目 山椒廿目 酒五合
艾廿目 番椒廿目
右七味よく細末にして
煮しおき毎に用ゆべし
腐りても苦しからずと云

○室なき所にて梅を室咲に
する事ハ花器へ沸湯を
入きこれへ挿て筥に
いれあたゝかなる
所に一夜おくべし
又井戸の水際に
はりおくもよし
冬ハ井戸の中ハ
陽氣のはつするものなり

二聖挿

朝露あるうちに切て根を湯につけ其後水へうつすべし

○菊ハ長途の水ハよろしからず宅に帰らバ早速前の切口と一寸ばかり切捨新しき水をもつて生込べしさあれバ花首際まで生こむべし

○挿貯へ花とも久しく置にハ川水よし又は梅雨の内おちる雨をたくはへ煤土と一塊火にやきあれを水に投おく時ハ久しく水腐らずこれ雨露ハ草木を恵むの理なり

○又紫銅の器物よろしからず土器を最上とす寒水にハ硫黄を入れおくべし凍ることなし尤も貯へおく内も毎日かへおく花ハ筌とすじて切べし

○芍薬ハ切てもしばらく陰干にして其後根をやきて桶に入藁薦を水にひたして包むべし内にて花咲出ることあるべく

○牡丹ハ折口を燈火にてやき塩を水へ入て生るバ久しくもつなり

○水引草ハ露のある内に湯にひたし其後水にうつすべし

○高麗菊ハ花の剪時ハ己の刻より未の刻を限りとす其余ハ時刻に切バ凋むて穢回ゆ尤も少し根を焼べし水をよく升るなり

○貝母ハ切口をやきて逆灌水とすべし

○辛夷ハ切口を割て蜀椒を三四粒挟て生器に入手水上て後挿ども蜀椒の数ハ枝の大小に應ずべし

○槿の花ハ朝やしおくべからず明日咲べき花をえらみて日暮て切根本一寸ばかり艾にてよく消炭の火にて行の養い方なり其焼る所を切さり又艾にてつゝみ再び焼て養桶に移し養ひ方

翌日より出し用ゆべし

○葭芦浮竹ホの養ひする用ゆる薬水ハ一説ニ
上昆布一夕 上ひしほ一合 此二品を水一升の中へ入八合ぐらゐに
煮つめよくよく冷し用ゆべし
又竹の類ひ川芎とせんじ用ゆるもよしとなり

○水葵慈姑ホの薬水ハ一説ニ
荒昆布一品水一升とのつて八合ホせんじつめ冷して用ゆと云

○蓮萍蓬ホの薬水ハ一説ホ
極上の唐昆布一夕 唐鹿尾菜一合 右同様ニせんじ用ゆと云

○石龍芻ハ切りて其二分一とのぞきて根元より一本づゝ揃へて和らか
ひしぎ夫より其程〳〵ニ束ね細くさける
木綿ごまきにて根元よりさしはさみて
巻にて好ミに任せてたくむ
介して大盥ニ冷水をたくへ
惣体これニひたし一夜
やしなふべし

石菖蒲 二株
同荊込三株 慈姑の會釈

○蓮萍蓬ハ随分精のつよきを撰ミ好ミに任せて木に添ふべし茎の痛まぬやうに上下紙捻にて結びつけ前より所の難ひをさしたく開葉までも自在にたゆる事是一ツの秘事なり

○柳ハ撓みかれのくせあれ前より南天などにてある法を以てためれバおもふまゝに任ずべし木によそつて上下どくつり大盥に水浸たく横にひたし養ふべし小枝のありびいしれバ焼おさへて股際をとめしよくすれバ自在にあるべし

○風吹柳ハ吹上の枝吹返しの枝などいづれも撓を第一にせざれバ形よくのびざる枝のまゝ方ハ灰火にてよく撓て紙にてまく所ゝを括りて大だらひに水を湛へ三四日もひたし養ふべし

粟菊

粟ハ三本五本の余生にも古来より食物のものハ生るをと憚るべしとのくり遠慮すべきなり

○雨久花剪刀草野茨菰藁石ホの類ハ切て暫く置てちく和ぎたる時沸湯に根を一寸ばかり浸し夫を切捨て用ゆべし竹の類ハ下の節より下二寸ほどの処にて切其の節の所まで穴をあけ夫を切もて冷水へひたし何も兼ても冷水をそゝぎ入おきて用ゆべし牡丹芍薬聚八仙水蔓青ホハ根を焼て切捨冷水に養ふべし菊の類ハ根をより川芎を挟みてよし又水に細末を入るもよし蓮ハ山椒と甘艸とを茶にて煮出し根より弾込みて茶入戻らぬやうに糸にて結びてよし何も毎々兼に水をそゝぎてよし

○花と瓶との賞翫の傳

○生花ハ色に分別あり花を賞翫して生る花あり又花器を賞翫して生る花もあり花器賞翫の花ハ一輪も葉の隠にかくれ様の心持にて花ハ心の遠慮あるべし花を賞翫の時ハ云に及ばず是ハ茶席の心得也

○一説に花を生るといふハ勝手に於て生るを主としての花器にハ挿るといふ故に二重筒を花生と称し其余の筒を花入と称せしかども織部公より出て表道具となりしと云

○客筒の事

○客筒といふハ往昔遠州公暑気の節客とむかへ御酒宴の催しありし時二重切の下へ肴を入上へ花を生て出されしより是に依て客筒と号し床に入るハ勝手の具なれ生方ハ凡通例の二重切りに准じて花も何と定まりしことなし唯時の宜にまかせてよし

容筒

遠州公好

筒の切方二重切ニ同じ

初心傳に竈花器に美人草を生るを霊照女といふ一書に八籠花器に手を着ることハ霊照女より始るといふ

然れバそのはじめ手着のかごに美人草を入て唐土の霊照女の風情に見立しより其竈の名とも霊照女とよぶなるべし

或生花の傳書に霊照女ハ唐土蓬居士の女にして十五歳より花を愛し千草万木を挿入て遊ぶ是よりして此筐の名とせしといふハ是大なる非なり霊照女ハ唐土襄州の居士龐蘊の女にして平生に竹をもつて筐を製し是を鬻ぎて父を養ひしなぞされバ花を愛翫せしといふ事なく按るに此霊照女の姿をうつして吾國に渡せるを見て思ひより手かご筐に美人艸を挿て少女の風情をうつしされバ奇作なるを後人傳へ誤りて種々の妄説を述るなるべしされバ籃の名にも有べからず挿る所の名ならんか則霊照女の画像といふハ唐土の少女手かご籃を携ふる姿なり佛像にて見つる魚籃の観音などゝ似よるものなり

傳燈録巻八

襄州居士龐蘊者衡州衡陽縣人也字道玄世以儒爲業而居士少悟塵勞志求真諦云々元和中北遊襄漢隨處而居云々 一女名霊照常隨製竹漉籬令鬻之以供朝夕

尚五燈會元郷邪代醉編にの説右に同じ

観音冥應集に魚籃観音ハ本説を見ざれバ疑ふらくハ霊照女の像に籃を持せるところやうにて魚籃観音と号するか或ハ馬郎婦と魚籃とハ一なりといふハ水月。馬郎婦。魚籃ハ大唐にあつて画きに出せる佛説にハあらずといへり

○龍花器のそもそもハ利休掛川の點竃を見て思ひ付花器に

桂籃
餌ふご
遠州公の
蝉かご
置かご
宗ぜんかご
これ宗ぜんと
長かご
桂籃
七種ハ利休の作
有馬籃
蝶籠
黄菊
丸籃
大黒袋
蛇籃
角籃
角籠

南京籃

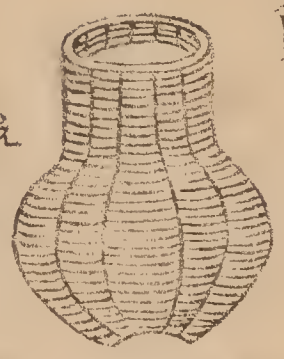
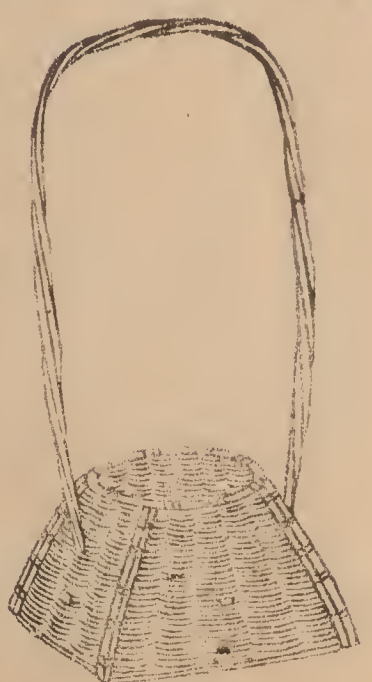
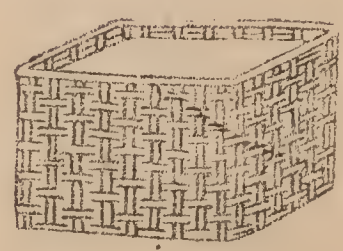
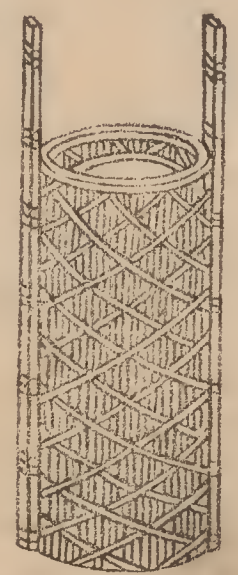
此釣篭ハ竹の組ものにて陶器の壺を水持とする之故人これに楝の花を挿られしが殊更よくして風流ありしとぞ

青篭

掛筐

是ハ中にうけてよるかごとし

尚此余許多ありといへども事繁ければ是を略す

此篇に洩るゝ口傳諸説ハ第九編に委しく出すべし

生花早満奈飛八篇畢

攝滬　鶏鳴舎暁鐘成編輯

生花早學　自初篇至十篇　都合十冊　成刻

嘉永四年辛亥六月發兌

書房　大阪心齋橋筋南久寶寺町　伊丹屋善兵衛梓